![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　令和２年度１２月号（20201224）

園長　平澤　正則

コミュニケイションを考える

　過去の出来事への感傷に浸ることが時々あります。今日「コミュニケイション」を思い出したのは保護者アンケートの「園は親に必要な情報を伝えている。」の評価値が少し低かったことによるものと思います。自慢にはなりませんが私などは，若い頃は目の前の子どもと接することに夢中で，子どものことしか眼に入りませんでした。相手は中学生でしたから幼稚園の園児と比べるのは少し無理があるかもしれませんが，毎日が生徒との格闘で保護者と連絡を取り合う余裕などなかったです。と言うとこれも問題ですが，事実，非行がひどくて親の手にも余るような子どもの親としか話をする余裕はなかったというのが正直なところです。それでも自分としては目一杯頑張り続けたつもりでした。親が何を望んでいたかなど勝手に想像しながら日々を送っていたように思います。そういう中で失敗したことはたくさんあります。自覚していない失敗も多くあったはずです。今でも恥ずかしく思い出すのは，受験校決定の三者面談の席上で『受かることはほぼないと思います。』と私が言ったその生徒が土浦一高に受かってしまったことです。発表当日朝の茨城放送でそのことを知った時は驚くと同時に素直に喜びましたが，直後には保護者の顔が目に浮かび大変困惑したことを昨日のように覚えています。その生徒は中村義洋といい，今では映画監督として「チーム・バチスタの栄光」「ゴールデンスランバー」などのヒット作もある有名人ですが、私にとっては３年間毎日暗くなるまで一緒にいた生徒でしたから，彼のことを一番に理解しているのは自分であるという自負心があったのです。彼のお母さんには面談以降会うこともありませんでしたが，私にとって「謝りたいことのある人」の一人です。保護者がどういう思いで子どもに接し，先生には何と言ってもらいたかったかなどを推察・想像することすらできなかったわけです。当時３１歳だった私はそのくらい教師として未熟だったわけです。

　翻って，善隣幼稚園の先生方の様子を毎日横目でちらちら眺めれば，先生方は毎日視線の中に子どもをとらえ，同時に手元の連絡帳にペンを走らせている姿があります。常に子どもの後ろにいる保護者を意識しているのです。幼稚園の現場では当たり前のことですが，ここに来たばかりの私にはかなり新鮮な姿に見えたことを覚えています。幼稚園の教師は子どもの動きから一時も目を離せない過酷な仕事だと思います。少しくらい目を離したって何事もないことの方がはるかに多いはずなのになぜか目を離せない。これも個々の資質によるものだと思いますが，善隣の先生方はよく見ているなと思います。と私が言うと，どう見ても贔屓ですよね。手前みそもいいところ。もちろん，足りないところ，未熟なところなど数え上げれば相当あると思います。それが人間であり，教師といえども例外ではありません。その足りないところ，できないところ，気づかないところを先生方には保護者の皆さんの力を借りながら補っていってほしいと願っています。

　家庭訪問についても思い出しました。小中学校の現場では最近（といってもここ20～30年くらい）家庭訪問を取りやめるところが増えつつあるようです。コロナ禍の今年は特別ですがそうではない理由によっての廃止です。保護者や教師が忙しくて面談の時間が取りづらくなったことが第一に挙げられますが，第二に考えられるのは，その必要性を認める教師と保護者の減少だと感じます。保護者は「家の中を覗かれるようでいやだ。」，「お茶菓子を用意するのが煩わしい。」，「たった１５分程度のことで一々休みを取るのはもったいない。」などと言い，教師は「覗かれるのが嫌だという人がいるのにわざわざ行きたくない。」「どうせ１５分程度であり大した話ができるわけではない。」などという人もいるようです。私に言わせれば，「バカなことを言ってんじゃない！」と言いたくなるわけです。コミュニケイションてのはそんなもんじゃないでしょ！って，声を大にして言いたいです。たった5分でもその現場で直に目を見ながら話すことの大切さが理解されない，あるいは軽んじられる人間社会でいいんだろうかと思います。